

東西文明の比較(20)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

478年に倭王の武(ワカタクエル=雄略天皇)が宋に朝貢して以降、倭は1世紀以上も中国王朝との通交を絶っていました。その間、高句麗・百済・新羅の朝鮮の3国は、宋(南北)の王朝の冊封を受けていましたから、倭の特異な国情が目立ちます。しかし、倭はその間百済との交流は続けていましたから大陸の情報は入手できていました。その頃の中国は、宋が南北に分裂し、韓三国は互いに争っていましたから、倭はそれらの紛争に関わりたくない、意識的に距離を置いていたのでは

ないでしょうか。

その大陸では大きな動きが出てきました。589年に北朝の隋が南朝の陳を滅ぼして隋帝国を築いたのです。当然ですが韓三国は、それぞれ隋から冊封を受けています。

600年に遣隋使を派遣

「隋書・倭国伝」には次のような記述があります。

「開皇二十年(600年)、倭王、姓は阿毎、字は多利思比孤。使を遣わして闕に詣らしむ」と。

韓三国の王は、朝貢に際して中国式の名を名乗っていました。例えば、高(高句麗王)、餘(百済王)、金(新羅王)などです。かつては、倭の五王も倭姓と「讚・珍・濟・興・武」などの個人名を使っていました。しかし、新たな通交をはじめたこの時代から姓は阿毎、字は多利思比孤とされました(通訳が名乗った姓名を誤訳したという説もありますが)。中国の「姓」の制度から離脱したのです。ところがこの遣唐使のことは「日本書紀」には触れられていません。その理由は分っていません。

「日本書紀」によれば、この7年後の607年(推古15)、「小野妹子を隋に遣わす。鞍作福利を以て通事(通訳)とす」とあります。小野妹子たち遣隋使の目に映った光景、100余年のブランクはいかがなものだったのでしょうか。百済との交流で情勢は知っていたとはいえ、実際の見聞には、相当の違いがあったことでしょう。

600年の遣隋使が帰国して間もない603年(推古11)、冠位が制定され、氏制度(家系中心)のなかの特定の個人を官人に登用し、功勞によって昇進する制度も創設されました。「冠位十二階」制定の4年後の遣隋使小野妹子は、「大礼」の冠を与えられて隋へ向かいました。

「冠位十二階」が制定された翌604年(推古12)、憲法十七条が制定されました。この憲法は、君・臣・民の秩序を整え、仏教や儒教によって国制の骨格を定め、大王の根源を神話ではなく、中国の政治思想に求めたのも、600年の遣隋使の功績といえるのではないのでしょうか。

戦乱の幕開け

この時期の東アジアは風雲急を告げます。598年、隋の文帝が高句麗に大軍を派遣します。ところが高句麗はこれを撃退します。文帝の次の煬帝も612年に百万と言われる大軍を派遣しますが、高句麗は抵抗します。煬帝は、次々と大軍を送りましたがその全てが敗走しました。その結果、煬帝は殺害され、隋は618年に滅亡します。わずか30年の命でした。

このような状況(戦乱)のもとで遣隋使を派遣したのです。この時も「遠交近攻」の策を用いて魏と有利な関係(三国志の時代、魏は呉を挟撃するために倭と同盟した。前号を再読してください)を築いた卑弥呼の例に学んだのでしょうか。608年小野妹子が再び隋に渡るとき、多くの留学生や留学僧を連れて行き、新知識の吸収に全力を挙げます。その一方で、彼らは帝国の興亡を身を以て体験したのではないのでしょうか。先進文化の取得と、争いご

との帰趨を学んだことは、その後の日本の運営に役立ったことでしょう。

唐が隋に成り代わって帝国を引き継ぎました。623年(推古31)、新羅経由で帰国した留学僧の恵日えいちらは、隋に送った留学生の召還と、唐との国交の開始を進言します。そして630年、第一回の遣唐使が派遣されることになりました。この時も倭は冊封を受けずに唐との国交を開くことに成功します。

戦乱が続く朝鮮半島

過去2回の遣隋使派遣に続き、都合19回、約230年にわたる遣唐使の時代が始まります。遣唐使といえば、古代日本が唐の進んだ文化を受け入れて国家体制を整え、古代文化を築いたこととして、阿倍仲麻呂あべのなかまろや吉備真備きびのまきびなどの留学生や空海などの留学僧の功績を思い描きます。しかし、そうした時代の唐は、想像以上の混乱期だったようです。宮廷における「権力争い」まで学んでいたのか、と思うと少し残念な気がします。

韓三国の高句麗・新羅・百済は、それぞれの国内で主導権争いが頻発し、三国間でも争いが絶えなかったようです。百済では641年、義慈王ぎじが即位しますが、支配層が対立。クーデターで権力を掌握した義慈王は、翌年新羅に侵攻します。新羅は王族の金春秋こんしゅんじゅう(後の武烈王ぶれつおう)を高句麗に派遣して援助を求めますが、高句麗は領土の割譲を求めます。それに対して金春秋は拒否、その結果囚われの身になりますが、かろうじて救出されます。高句麗では宰相の泉蓋蘇文せんがいそぶんが、国王をはじめ大臣以下100余人を惨殺し、傀儡の王を擁立し、百済と結んで新羅を攻撃します。韓三国は、唐に対しても朝貢して冊封を受けていました。冊封を与えている以上、唐の皇帝は、それぞれの国の争いを調停しなければなりません。645年2月、唐の太宗は高句麗の征討軍を自ら指揮して洛陽を出発します。

その頃の日本はどうであったのでしょうか。倭の飛鳥板蓋宮いたぶきのみやで、蘇我入鹿そがのいるかが暗殺されるという宮中クーデター(乙巳の変)が起ります。645年6

月のことです。大臣の地位を父の蝦夷から引き継いだ入鹿は、有力な皇位継承者であった山背大兄王を襲い、一族を滅ぼしてしまいます。そして、蘇我の血をひく古人大兄を即位させて権力を握ろうとしていたのですが、そのもくろみは見事に失敗します。このクーデターの主役は、中大兄皇子(後の天智天皇)と藤原鎌足です。

新制度の始まり

蘇我一族が消滅すると、皇極女帝は退位し、弟の孝徳天皇が即位します。初めての生前譲位です。これまでの朝廷では日嗣の御子や太子が定まっても、先帝の死によって自動的に即位することはなく、朝廷を構成する豪族たちの推戴によって即位し、群臣によって大王位を象徴する鏡や剣などの神器が献上されました。この時以来、新規に即位した大王は、新たに大臣・大連らを任命することになりました。先帝時代の再任でも改めて新任することにしました。これらのことは皇位継承の権利が独立したことを意味します。

大化の改新政権の発足

中大兄は孝徳天皇のもとで皇太子となり、鎌足はその腹心として内臣になりました。それまでの大臣を左大臣・右大臣に分け、官僚化を図りました。更にブレーンとして国博士を設け、唐留学から帰国した僧旻そうみんと高向玄理たかむねのりを任じました。大化の改新は直ちには実現しませんでした。国制の基本的な変革の方向性を示し、その第一歩を踏み出した意義は大きいと思います。

雑感ですが・・・この文を書きながら思ったことです。

高句麗は、現在の北朝鮮と旧満州の一部(遼寧省+吉林省)を領土とする強大な国家でした。昨今の中朝関係、特に北朝鮮の中国に対する態度もこうした歴史を知れば、一筋縄ではいかないようです。と同時に「遠交近攻」策を利用して、日中関係を好転させる「策」があるのではないかと思う次第です。いかがでしょうか？